

# 馬鈴しょでん粉の生産・販売状況と安定生産に向けた全農の取り組み

## 国産馬鈴しょでん粉の生産動向

北海道におけるでん粉原料用馬鈴しょの作付面積は、平成28年産、令和2年産の不作を契機に減少傾向でしたが、令和3年産を底に下げ止まり、ここ2年は微増で推移しています。(図1)。

馬鈴しょでん粉の生産量をみると、令和2年産は低温・日照不足により16万3,000 t (JA系統および商系)、令和3年産は高温少雨の影響を受け14万9,000 t、令和4年産は降雨による腐敗芋の発生により15万4,000 t、令和5年産は夏以降の記録的な高温によるでん粉含有量の低下により14万8,000 tと、4年続けての不作となっており、令和4年産以降は需要量を下回っています。

## 国産馬鈴しょでん粉の需要動向

新型コロナウイルス感染症の影響により減退した外食向けや土産物需要が回復するなか、令和2年産から続く不作により生産量が落ち込んだため、新規推進の中止や繰越在庫を活用することで既存の需給を維持してきました。その結果、令和3年9月末に3万4,000 tあった繰越在庫は、令和5年9月末では6,000 t程度にまで落ち込みました(データ省略)。令和5でん粉年度(令和5年

10月～令和6年9月)においては、令和5年産の不作により、前年並みの需要を満たす供給数量の確保が困難なため、販売量の調整を行い、需要の引き締めを実施しています。

## 全農の取り組み

### 安定生産に向けて

需要に応えるための生産量の拡大が急務となっているなか、全農では、販売先やユーザーに理解を求め、令和5年1月に10%程度、令和5年10月には15%程度の価格転嫁に取り組みました。

また、でん粉原料用馬鈴しょの作付面積の拡大に向け、JA、ホクレンと協力し、次の取り組みを進めています。

- ①チラシやえびせんべいを全生産者へ配布し、作付面積の拡大を依頼(写真1、2)
- ②メディアを通じた生産者への情報伝達・作付依頼
- ③JAでの勉強会への参画
- ④馬鈴しょでん粉生産者講習会(でん粉実需者による講演・情勢交換)の開催
- ⑤栽培共励会(優良生産者の表彰、栽培技術の横展開)の実施支援

さらに、国産馬鈴しょでん粉の安定生産へ向けた取り

組みとして、関係機関、ホクレンなどと協力し、でん粉原料用専用品種のジャガイモシストセンチュウ抵抗性品種への切り替えを進め、令和4年産の作付けにおいて抵抗性品種への100%切り替えが完了しました。令和5年産は、ジャガイモシストセンチュウの抵抗性を持つ主力品種「コナヒメ」の割合が78%にまで増加しています。

### 2024年問題への対応策

次に、物流における時間外労働時間の上限が規制されるいわゆる2024年問題への対応策として、ドライバーの負担となっている手積み・手降ろしの作業

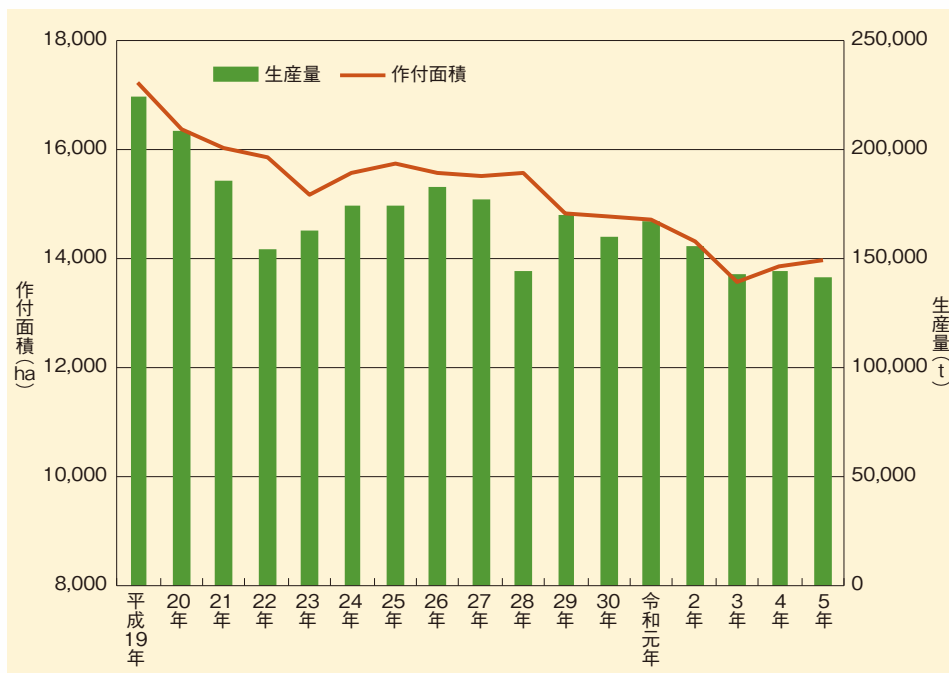


図1 北海道産でん粉原料用馬鈴しょの作付面積とでん粉生産量の推移(JA系統)

たくさん作ってください

# 日本全国で馬鈴しょでん粉が足りなくて困っています

でん粉原料用馬鈴しょの作付面積が継続して減少しており、幅広く暮らしを支えるでん粉が不足しています。

作付面積

年次	作付面積 (ha)	でん粉生産量 (トン)
H29	14,807ha	181,900
H30	14,823ha	169,900
R1	14,735ha	176,600
R2	14,327ha	164,680
R3	13,560ha	150,100
R4	13,840ha	152,600

特作面積が減少と、ほとんどでん粉が足りなくなっちゃっ

幅広い用途の需要に応えるため  
でん粉原料用馬鈴しょの作付面積の拡大にご協力をお願いいたします。

全農 北海道澱粉工業協会

写真1 全生産者へ配布した作付面積拡大依頼のチラシ

## 暮らしを支えるでん粉の需要に応えたい!!

### 馬鈴しょでん粉の用途

でん粉ってまじっ!!

馬鈴しょでん粉の持つ特性を利用してさまざまな用途で使用されています。

食品用

- 片栗粉
- 水産・畜産飼料
- 菓子
- 前処理でん粉(動物)
- スープ・惣菜

糖化用

その他

でん粉を加水分解し、澱粉糖類として食品配料水やチューハイ、各種醸造向けに使用されています。

それ以外にも畜産用として穀物の成形やブラードの原料、精密機械の製造用にも使用されています。

実際に使用している企業の声はこちらから

生産振興に向けたホクレンの取り組み

- でん粉販売単価の値上げ
- 共助会の開催
- 栽培技術確立に向けた営農支援

全農 北海道澱粉工業協会



写真2 全生産者へ配布したえびせんべい

軽減に向け、パレット輸送の取り組みを進めています。馬鈴しょでん粉は、全国のさまざまなユーザーに使用いただいており、産地からの届け先がおよそ500ヵ所にもものぼることから統一的な対応が難しいのが現状です。ただし、こうした状況のなかでも、産地から消費地への度重なる輸送試験の実施や、消費地側の受け入れ態勢の確認、関係者との打ち合わせなどを通じ、令和6年10月からの段階的にパレット輸送を実施できる目途が見えてきました。今後は、関係者との綿密な打ち合わせや先行して実施するパレット輸送先の選定などにより、パレット輸送の実現に向け、引き続き対応を進めていきます。



馬鈴しょでん粉は、片栗粉や即席麺、かまぼこ、えびせんべい、ポーロ、春雨などのさまざまな加工食品の原料としての使用や糖化・化工用と、裾野が広く、なくてはならない原料として定着しています。昨今の不作による生産数量の減少により、販売数量を制限せざるを得ない状況となっており、現在の需要をどう守っていくかが、喫緊の課題となっています。全農では、馬鈴しょでん粉の安定的な供給に向け、馬鈴しょでん粉の価値向上や生産基盤の確立に産地とともに取り組んでいきます。

【全農 麦類農産部 でん粉・食品原料課】



写真3 パレット輸送が実現すればドライバーの負担を軽減できる